

# ほだ木生産跡地のぼう芽状況について

中新田営林署 ○森林官 高橋 寿 顕  
森林官 佐藤 宏 平  
森林官 小出 一 雄

## 1 はじめに

中新田営林署管内の国有林は、宮城北部森林計画区に属し、中新田町、宮崎町、小野田町、色麻町、大和町に分布している。大きく分けると、山形県境に接する奥羽山系に属する地帯と町の近くに点在する丘陵地帯に分けられる。奥羽山系の天然林は、ブナを主体とする広葉樹林であり、里山にある丘陵地帯の天然林は、ナラ、クヌギ等を主体とした広葉樹林である。

なお、これら丘陵地帯周辺の農家ではシイタケ生産が盛んであり、ほだ木の生産が求められている地域でもある。

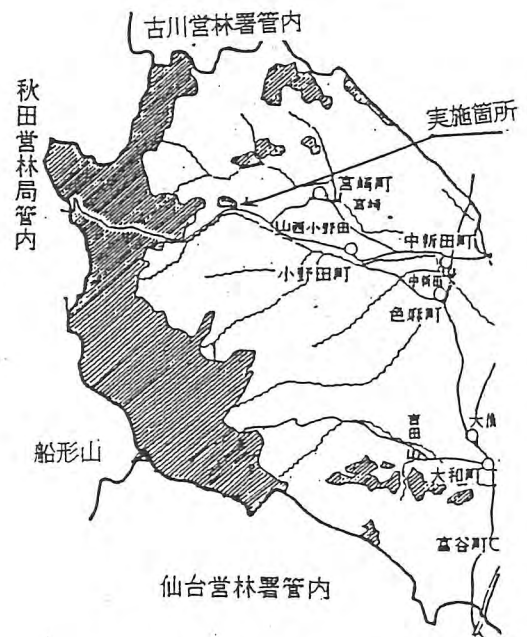
## 2 取り組んだ背景

当署では、昭和60年度より冬期造林事業の特定事業として、シイタケほだ木生産を始めて10年になるが、作業地はこれら丘陵地帯の天然林において、実行してきている。

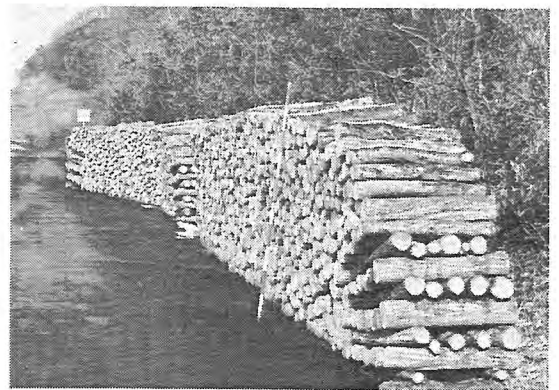
販売先は主に地元の生シイタケ生産農家であるが、民有林のほだ木生産量を含めてもほだ木生産が需要に追いつかない状況にある。

国有林の資源状況等をみれば、毎年の事業実行に伴い、生産地の奥地化、資源の減少などの問題点がでてきている状況下にある。

(図-1) 実施箇所位置図



「ほだ木生産状況(棚積)」



別表-1

年度	材積 (m <sup>3</sup> )	本数 (百)	金額 (千)
3	70	117	1785
4	85	87	1497
5	32	52	777
6	30	41	630
7	36	51	749
計	253	348	5438
年平均	51	70	1088

「調査箇所状況 (かん木地帯)」

これまでに実行した伐採跡地をみると同一箇所でも樹冠の空きぐあいや、植生の繁茂の状況により、ナラのぼう芽の数が大きく異なっていたことから、今後の作業方法等を検討するうえからも必要と考え経過等を調査したものである。

なお、5ヶ年間のほだ木生産数量は、34.8千本で、収入としては5,438千円となっている。

年平均にすると7千本で1,088千円になっている。

#### 調査方法

調査箇所は、宮城県加美郡小野田町字梨子沢国有林8林班い.ほ.へ.小班で、

平成2年～4年度に実行したほだ木生産跡地を、樹冠の空きぐあいにより、疎、中、蜜の三種類に分け、下層植生の状態により、笹地帯、かん木地帯及びヒバ造林地(樹齢56年)の三箇所について、無作為に一箇所5本づつを伐根長径、伐根短径、伐根高について調査した。



#### 4 調査結果

別表-2は、クマイザサがm<sup>2</sup>当たり40～50本で高さ70cmの笹地帯である。

疎の箇所では、2本ぼう芽し成長しているが、他の箇所ではぼう芽するが枯死していた。

別表-2

	伐根長径	伐根短径	伐根高	発生根数	ぼう芽数	最高樹高
疎	10～24cm	10～22cm	20～40cm	2本	2～5本	90～140cm
中	10～28	10～24	10～70	(1)0	(7)0	0
蜜	12～18	10～16	8～50	(2)0	(3)0	0
計				2	7	

別表-3は、ユズリハ6. イヌツゲ2. その他2のかん木地帯である。

疎の箇所では全部にぼう芽し成長していた。中の箇所では5本がぼう芽し4本成長していた。蜜の箇所でも1本にぼう芽し成長が見られた。

別表-4は、56年生ヒバ9. 広1. の造林地で下草植生は日の入る所にかん木が少し見られる程度のところである。疎の箇所では全部にぼう芽し成長していた。中の箇所では4本にぼう芽し1本が成長し、蜜の箇所では3本にぼう芽の跡が見られたが全部枯死していた。

表-5は、表-2から表-4までの表で、ぼう芽して成長したものを、まとめたものである。この表からは、樹冠のあいている方がぼう芽の発生に適すること、笹地帯よりも地表に陽光が入りやすいかん木地帯がぼう芽の成長等に適することがわかった。

別表-3

かん木地帯集計表 3年度伐採 ( )書は枯木計算外						
	伐根長径	伐根短径	伐根高	発生根数	ぼう芽数	最高樹高
疎	22~30cm	20~24cm	16~30cm	5本	2~10本	140~200
中	8~36	8~36	8~50	(1)4	(8)3~6	70~120
蜜	16~30	14~24	8~30	1	4	70
計				10	53	

別表-4

ヒバ造林地帯集計表 4年度伐採 ( )書は枯木計算外						
	伐根長径	伐根短径	伐根高	発生根数	ぼう芽数	最高樹高
疎	16~34cm	14~30cm	14~20cm	5本	7~17本	90~200cm
中	10~32	10~26	10~36	(3)1	(12)8	90
蜜	14~30	14~24	8~46	(3)0	(8)0	0
計				6	72	

別表-5

ぼう芽発生成長伐根状況 単位：%				
	笹地帯	かん木地帯	ヒバ造林地	計
疎	40	100	100	80
中	0	80	20	33
蜜	0	20	0	7
計	13	67	40	

## 5 考察

今回の調査は、データが少ないことに加え、皆伐跡地との比較検討も不十分な部分もあるが、①ある一定の陽光を林床に入れることにより、伐根にぼう芽力の促進させることができること、また、②林床に陽光を入れることにより、ナラ類の大敵であるカワラ茸、カイガラ茸等の不朽菌の発生を抑えることができるという専門家の意見等からも、①群状に伐採する。②下層植生の除去を適切に行う。こと等により、間伐であってもぼう芽による再生産が可能と考える。

## 6 まとめ

「はじめ」に述べましたように、当営林署の丘陵地帯周辺の農家ではシイタケ生産が盛んであり、シイタケ原木の持続的供給及びナラ等広葉樹林の有効活用からも、継続的なシイタケほだ木生産を実施し、地域との連携をさらに綿密にして国有林野事業の円滑な事業実行へと前進する考えである。

また、当地域の丘陵地帯は、民家も近いことから国土保全、景観維持等にも配慮した作業を行ってきたわけであるが、さらに、自然景観等に十分配慮した作業方法等を検討のうえ、「持続可能な森林経営」の理念の下、国民に理解されるよりよき国有林へと考えているところである。

「間伐実行状況」



「民間のシイタケ生産ほだ場」



「里山の丘陵地帯（南川ダム周辺）」

